

改正三河後風土記

廿七

三河後風土記



改訂三河博風古記卷第拾七

目錄

- 藍山城五錢之事
- 堀秀政陣中病死自伊達南部山岩城  
降愷小之東陣之事
- 懸城賣之事
- 懸城五錢之事
- 懸城水賣石田朱葉之事
- 成田隆余自懸城軍退之事
- 松田隆謀病歿之事



A210  
1-27A

一 丹伊志政薩田曲輪熟切之事

改正三河後風土記卷第拾陸

蕪山増再録

小保原儀守氏規々節々守りて河豆州蕪山の  
増を以て在勢大軍々々々々取圍日夜岩處  
攻りていへとも兵儀守武畧道一々々  
士卒を以て不事々々は只の如く守りて  
毎首々々利を失はば疾吉公此増を  
若干れ人殺を以てせん事々々益々々々ハ  
々々々小富内府を以て希生細川中川  
福系由皆小田原八百云々々々輝酒雲  
阿波守家政福清土長吉史正別明石

右道平文安則少と疎一遠き一々  
空く月日を送ら一めらる頃八天正十八年  
五月十九日不詳福清峰原不詳年州石赤  
諸將を激一お終は斯いつくやと  
此情遠きよのみ月日を送らん事世の  
人口もいゝなりいさや今日は無心と  
一故中一旦改は政務一殿下此感よ  
願らまやしとく年夜下り十重母重  
不は系と改具と自ら一無新國の  
声と揚たを山河も志動まらと  
管まら城内よと是を治れと曰く

同と令せ甚後は用り送らかりも強く  
お父形一城將安儀と氏想は去年よ  
可知一門一擧一城裏近よ是情をお交  
射よを配り其言毎よは此能是情  
一門一走り矢倉よは石壁をけり城深  
よは鞠本營を若干並を城をよ  
よのは鞠本營よ一実原さんと彼  
たり其外の批兵甚は己く、將道具持せ  
いさといさよと用意を言改  
矢頭通くなり一は城内の射も矢倉  
をけり首先を掃一矢籠を丸も事



城兵を召寄せし時、八幡の旗を城門  
視し、押寄りて旋風の勢を以て飛  
ぶ。大勢の中、宥めざる福徳の  
先、侍大将福徳丹波回部郷不忠  
少元村上と名乗る大流玄蕃林飛物  
以下の勇士階級へ、少くも百廿の旗を  
旗を合を烈く翻し、兵を交し、正則  
遙く此陣を以て、先登の云討す。其  
後、後者とも、如く是を八幡勢、争ひ進  
む。岳隈吉氏、惣此付自置兵千餘人を  
川邊、折る。其二も、是を福徳勢、

左右の旗より、宥めざる福徳の先、侍  
軍、左右の旗より、宥めざる福徳の  
故をせん。其を以て、正則、自置七百餘人  
を、川つぎ、蕃屯より、折る。其、吉氏、惣慮  
撓り、以て、勇氣益十倍。其、福徳、  
二十五名の勢を、我勢千二百と、も、吉  
氏、惣、自置、遣を、据、馬を、走、せ、也、十、方、  
流、散、一、敵、回、也、其、威、風、凜、々、と、  
吉、の、飛、將、軍、岡、衛、軍、の、宥、め、ざる、  
と、思、ふ、と、も、折、り、吉、氏、惣、元、來、局、同  
宥、め、ざる、人、は、強、き、其、の、力、量、皆、倫、不、

卑絶一柄の長さ七寸、幅約二寸余の  
大舟の體と打撈く、前後左右に要所  
敵倒一奮戦をまは流石極力舟の  
福徳智も辟易一逆と開く川色も  
刃一よち舟中村大舟の云々も一回、  
改定不付城をも防蓋(き)よ大舟の方も  
ら沈絶は射まらぬ打一ら備さず虎口  
と川浪を搦るの福徳智の苦戦と  
政一ととせきり一は大舟の方も  
防たる城の中は沈絶の者五拾人(川)中  
正則智一丈一き付たの尾流(出)流

と舟を舟室よおかく、後陣の福徳智  
強ましく、後より定宿老陣と、是を  
刃く力に決く、虎口と川を城兵船は  
宗一と出討せんと、是も知氏、柳橋と  
見て揚、貝吹、怪く人散と川入り、其  
を退、自由を返たす事、神のや一と  
言ふも、是と感、跡を正則は城を川に  
見下付入、小せんと川返一と、  
不知、是をば福徳、共とも門、城下  
舟の、楫のや、ち、是は城を、楫を川に  
と、と、更、と、眼、そ、や、う、ち、ち、増、云、歎、

幕の巻川入雖く五へし知は増持氏規  
力者も持を昔侍大薙刀とあり一番  
了し進まざる徳田忠節九郎と稱しうら  
薙刀一徳く馬侍安西忠活下藤と治  
とて三可又福清の軍士六人薙刀屋六  
此極威は薙易し一可少し一於極威は  
その方は増持の川入たりを中し  
横井新茶友盛大石四方の約定取工氣  
少部三郎祐光小笠原十郎長治之浦  
與一重の薙規小机徳理亮元重の六人  
徳を以て稱はれお進い少しと氣立

希は能く少の志らみて進まぬ事あり  
氏規も六人も増持の川入の門扉を三んと  
せし如く福徳勢の中より不覚に薙刀  
河内たの首二とを土居の傍に投じ徳の  
柄を再び門より中へ寄せし由り門扉  
不徳を交して門扉を閉じ交能く其時  
才前ハ徳を投捨左右の少しと力も  
但せ中へ声しと押被らんとは増持六  
大勢しと押被らんしと内より押た  
福徳の勢しとは才前も力も合せん  
大勢池多の首を三可射しと増持より



弓掛地雨の心く射か—打か—あるか  
福清勢心付矢極よそやまことと出ず  
つき極もや—さきとも福清丹波大津  
玄蕃林飛し物は矢絶の中を渡り  
方新のまはる如返奪り才新よ力せと  
流くとも—門扉と押出んと—丹波  
味方へ勢を招きをまくと呼ぶは  
槍の上中々—就まるとの女人とあり  
浪飛し歩倒さきも丹波の若黨山林至窮  
軍田新六丈をもたきし馳参て是も  
力を流曲くとあまの船は雁は吏—

才新の遊蜘蛛首より押打まて極云  
終り門扉を閉り有り—門扉の  
矢極向より遊長刀をわ—密拂—は  
山林軍田は討ま—と—不忠方新  
丹波飛し物玄蕃八郎もあはは屋裏  
正則此形勢とらん—此中—急よハ  
流りあはし流勢川流—と—急を借—  
揚貝をさき—若きは急落川返りし付  
丹波玄蕃飛し物才新に人—踏交向と  
川流ある其中—も才新ハ打参守り  
遊り歎り首に丸流り—最極より—後敵

して川内備將貞徳を氏親播磨のふ  
りて宣ふは凡彼亦は天徳の勇士なりと  
甚感一播磨の矢絶と爲めてとの  
姓名と尋ふるは四人の峯橋氏にて  
之辨り是は福治と爲つて一人下  
福治丹波大治を事ふ可也乃前播磨の  
中者と云ふは又姓名を尋り又  
同しと立揚る天徳也一も武士と  
歎きしと播磨の声を立ててと感  
今播磨の矢絶同と橋梁とはこそ可憐  
不十百官を有りたまは此絶と云ふ處

詩んとしよ者も数多の者もと氏親  
少くも侍勇士を嬉ねく少敷人は  
軍和志一々必軍神の眞尋を盡  
そのなりと戒て矢絶を制一放  
めは城をいさと大將の寛仁より  
四人の勇士を物歸は其言をんせん  
四人は後の方三時河内り満きる者の  
曾叔を折捨余尚玉後よ一二人  
阿たり三人もく折倒を侍才翁を始  
四人の者在東陣一帰り其れは四人  
正則進くを一汝亦今日の別勇也

感<sup>せ</sup>ら<sup>る</sup>不<sup>し</sup>や<sup>う</sup>と<sup>く</sup>太刀一<sup>張</sup>ヲ母<sup>使</sup>  
番<sup>一</sup>物<sup>主</sup>番<sup>と</sup>与<sup>ふ</sup>才<sup>者</sup>ハ<sup>徳</sup>を<sup>取</sup>  
た<sup>ま</sup>は<sup>す</sup>と<sup>く</sup>正<sup>則</sup>秘<sup>策</sup>を<sup>取</sup>て<sup>一</sup>以<sup>平</sup>の  
長<sup>刀</sup>ヲ<sup>佩</sup>刀<sup>と</sup>爲<sup>す</sup>授<sup>者</sup>リ<sup>因</sup>白<sup>福</sup>清  
輝<sup>因</sup>を<sup>其</sup>の<sup>昔</sup>我<sup>と</sup>感<sup>祿</sup>と<sup>り</sup>し  
さ<sup>る</sup>よ<sup>う</sup>は<sup>揚</sup>州<sup>中</sup>條<sup>兵</sup>陳<sup>と</sup>防<sup>禦</sup>の<sup>統</sup>  
令<sup>我</sup>の<sup>進</sup>退<sup>軍</sup>監<sup>大</sup>の<sup>中</sup>不<sup>の</sup>あ<sup>き</sup>は  
守<sup>岸</sup>の<sup>卷</sup>取<sup>ら</sup>れ<sup>被</sup>殺<sup>多</sup>く<sup>改</sup>拉<sup>人</sup>と  
せば<sup>味</sup>方<sup>と</sup>若<sup>干</sup>死<sup>亡</sup>と<sup>く</sup>色<sup>を</sup>備<sup>へ</sup>  
今<sup>より</sup>後<sup>汝</sup>亦<sup>益</sup>遠<sup>老</sup>と<sup>く</sup>廻<sup>討</sup>後<sup>活</sup>  
の<sup>用</sup>意<sup>を</sup>取<sup>ら</sup>ず<sup>考</sup>ま<sup>の</sup>備<sup>を</sup>者<sup>を</sup>と<sup>す</sup>

洞<sup>へ</sup>ち<sup>る</sup>屋<sup>一</sup>安<sup>と</sup>兵<sup>を</sup>動<sup>う</sup>け<sup>ら</sup>れ<sup>る</sup>  
小<sup>田</sup>宗<sup>正</sup>一<sup>高</sup>城<sup>せ</sup>は<sup>並</sup>山<sup>ハ</sup>自<sup>然</sup>小<sup>編</sup>  
隣<sup>と</sup>刀<sup>改</sup>は<sup>幸</sup>圓<sup>と</sup>り<sup>と</sup>然<sup>と</sup>論<sup>一</sup>  
と<sup>く</sup>と<sup>く</sup>  
論<sup>年</sup>  
山<sup>田</sup>宗<sup>正</sup>

堀<sup>長</sup>政<sup>清</sup>中<sup>二</sup>病<sup>死</sup>自<sup>任</sup>達<sup>南</sup>部  
岩<sup>城</sup>清<sup>恒</sup>亦<sup>し</sup>志<sup>清</sup>と<sup>す</sup>

五月<sup>廿</sup>七日<sup>は</sup>因<sup>白</sup>一<sup>方</sup>の<sup>大</sup>將<sup>と</sup>頼<sup>重</sup>  
た<sup>る</sup>堀<sup>長</sup>政<sup>清</sup>改<sup>早</sup>川<sup>只</sup>の<sup>備</sup>と<sup>す</sup>り<sup>、</sup>  
備<sup>中</sup>も<sup>病</sup>死<sup>て</sup>自<sup>ら</sup>卒<sup>と</sup>す<sup>一</sup>ぬ<sup>歳</sup>ハ<sup>樹</sup>  
三<sup>拾</sup>ハ<sup>歳</sup>未<sup>だ</sup>と<sup>壯</sup>年<sup>敵</sup>の<sup>能</sup>と<sup>て</sup>感<sup>不</sup>  
踏<sup>交</sup>信<sup>歎</sup>と<sup>せ</sup>り<sup>一</sup>此<sup>人</sup>始<sup>久</sup>去<sup>郎</sup>と<sup>す</sup>

智謀勇武双しきく、新古今創業の  
時より、佑余の四子なり、今有、奥州  
まては、平均一なるは、此人を以て、奥州  
の藩主たふし、めんと、敵下、忍て、  
と、り、り、あ、新、創、業、を、事、し、り、と、は、  
歎くせり、や、こと、ま、り、なり、せ、り、と、  
此人をば、名人、たつと、名、を、天下、の  
指、目、さ、せ、り、と、も、職、有、り、る、人、と、  
中、の、事、は、此、有、り、と、も、人、も、城、ま、り、も、  
備、さ、り、と、の、時、一、そ、子、久、吉、部、秀、治、  
時、よ、父、の、家、を、継、承、僅、に、十、五、七、り、

越前山をの城と領一、廿九万八百五拾  
揚、い、息、よ、位、位、下、位、位、位、位、位、位、位、位、  
叙、位、七、位、位、位、位、位、位、位、位、位、位、  
仲、達、十、位、位、位、位、位、位、位、位、位、位、  
芦、名、新、廣、田、村、大、橋、右、衛、門、左、衛、門、  
昭、光、白、川、の、義、直、位、位、位、位、位、位、位、  
定、徳、二、本、松、の、右、京、亮、義、徳、位、位、位、  
止、一、と、一、と、一、と、一、と、一、と、一、と、一、と、  
足、川、の、權、左、衛、門、位、位、位、位、位、位、位、  
振、い、一、と、一、と、一、と、一、と、一、と、一、と、  
川、年、一、と、一、と、一、と、一、と、一、と、一、と、



長きより善天の下率七の頃を合を  
せんもくねの者千里を遠くとせし  
我のりも個彼せざる者なり物と女  
累代の意を更継致部乃地を押順  
一ねく終る二方の使臣をも合せし  
對交流の大名おと地を争て兵を  
據、芦名はさしも南家は志保より  
一と彼家を討ちして合津仙道  
土郡を合奪の条以のかれ曲事  
なり吃と一と陣一と一と以下  
さる政宗取り澤く若事ハ

一相一夕の取はいつ政宗の父輝宗  
部亦は大内偏家と一者輝宗小  
叛の取其者を誅せんとはる若名  
義之廣より一と大内と内也一と  
佐竹岩城をもと謀一合て我家を  
とさんと一と希もゆつて先大内は  
退治はね程なく父輝宗二本松右衛門  
義隆を討ち討ちつは某父の顔と  
二本松を討ちとす若名此時も又  
佐竹岩城と謀と也一と本松を敗  
政宗を討ちさんとす取と摺と宗と

於て一戦の鋒はさるる名義之度と  
討てしはさかしくも大勝は其の徳義隆  
最上少羽も義光も皆改宗と年月有  
り不し其来深し款を受て日夜の  
戦止付も道途には皆塞て泊り  
城の事をたし知難し城にて遠隔  
の事は甚よたし知難し城の一介の  
使をたししあはせしは事一令王命を  
愠し敵と茂如きはしは事一令王命を  
とぬ又さるる及し始り敵下河海を  
難く天下路は隔ちし知し事一と

存せししは道城皆款の支らるる  
ありしは向すの事と備はししはこ  
款地を遊巡りてありしは思ひし  
しはも是川よ及しは善園白より汝  
何れは道に親族と争論ししは  
由城を争へしはと款回をくけしは  
改宗又善者ははしは不審しはしは  
最上少羽も義光も叔姪の好を捨て  
改宗家人 鮎貝敷を即しは是れ  
進め改宗と討てさんと計り相馬  
津正少漸義流は改宗の男田村左衛門

清教の死を幸とて改宗の家入所  
澤正は逆意せし丸田村の不領を  
奪ふんとするが是亦皆止事を増す  
某一發よりいひ大津茨屋ハ某の前頭を  
奪ふんとていふきは是も干戈よりい  
ひいとも皆止事を増す澤正よりい  
改宗安んず争戦を好まははいつい  
改宗安んず争戦を好まははいつい  
かく苦たり空白をいひ小懐の滅亡道き  
アアア秀吉又王命より東夷有  
つこは流賊せんと思ふなり改宗の

陣一中羽鶴なりはは侵奪金陣  
仙道の地甚きなり軍門の回復をい  
若又此よりいひは已う西陽の  
用をせよと改下さる改宗取ら已よ  
く金陣をいひは死生皆部下の回復  
たむ改宗の部下の死生皆部下の回復  
何れも台命改宗はははははははは  
関白大に甚く不離勝なりといふ  
の本陣より石巻たり改宗は是れ  
誓ふとて改宗はははははははは  
芝原は期に麻よりいひ素乳は陣羽織



幕々對面しつゝ形々山の崖際  
改宗を石て汝田舎の小迫合よの女  
馴てはは大軍の備配をえきさるも  
有へふはと自ら改宗を伴ひ崖際  
不之々利害を浚示しつゝは  
たや東州へ歸り去る者わ白哉  
侍へきなりと治りき事しつゝ  
改宗大の殿中の大音も感服し早  
底倉と立てて會津へ赴く東州嶺の  
順之岩城を去る常澄も時頼小田  
急る遠路断絶を凌ぎし常澄せし

事也感之々相願安堵の以教書と  
揚小志しつゝ常澄、相州早谷に在陣  
せり又回ふ津燈に常の館人津燈如紙  
勢海軍部を信とくは月代、南江の  
波宮しつゝ津燈の地は信を迫軍南郷  
家衰しつゝは信南郷の勢入九戸他理  
并柳川河内中と蝶し合を津燈の地  
悉く切徑しつゝは常の城を兼く信し  
迫もは極威を振しつゝは信恰利城者  
なりしつゝは因白東白しつゝはとせし  
均く京に坐り近侍殿しつゝは古事契し



彼をきくんとせば我家子部未だ省  
ず田舎者之語を異なりけり此如く  
都人の少くも一とも思ふは此い  
せんと業一類之語を此体をも  
然らば何の苦一もなき事此と稱  
小田原より京の宮中へは御英廟の  
思ふとも精く申す事ありしと申  
佐田も是より精一なる事ありしと  
大に悦ひ去り清翁を彼より信之尚  
乃七歳なりしはとて邊地より馬川  
小田原道より世きり関白少少  
申す

乱逆道塞りしと申す、彼も亦志  
清くはと感銘し、佐田共申す  
大に悦ひ去り清翁の徳を言ひ、  
輒後佐田の語を聞いて小田原より  
駿馬五十匹を贈り、関白は海獨り  
甜文に感銘し、風次は昭々たる  
津羽城を賜ひ、而して佐田の  
書を下す、是より佐田は  
喜し、津恒九郎は、先日は  
関白より、津恒の地は先日は  
少教書賜り、事、其書は、今更

せゝゝき事難一丸の羅連二一  
 礼さゝも若きは汝早歸一秀吾ら  
 下白侍と一も一仍も一徳也。は帳  
 場りぬ其時因白の通旨一々ハ南都  
 津恒ホウ事は免も何とせり。伊達  
 政宗は東面一ハ奸敵なり。是を洋一  
 帰面させ治め度と千里の地と  
 放つや一と中若も因白此の少石  
 物ホウ知事有であらば一微笑して  
 ありし一也。藩譜編年他一徳恒の通旨家内  
 徳恒の物も互に有し。是ありて一徳恒の  
 男も河一この後流たりと一不徳のや

忠誠奏之事

石田長末大名の徳林の地已  
 洋と糸一若も一史より新州忠の地を  
 不日一政人とを致せり。此城を石田藩  
 氏長は勤く一氏政の徳恒一任ハ三橋  
 川具一して小田宗一勤備せり。其妻女  
 甲斐一數人其妻は家元石田丹波酒卷  
 勤員業海和泉吉田和泉と母某一  
 中若は備也。一勢救万の大軍一  
 近白徳林の城を攻め一安城一押高  
 一風流を感の宮に托し一也。ハ

豈といひ小勢なりとも城下りあてか  
川俣の宿陣、其々新に安防我を  
しきある劇も身在る所なりと小西亦  
勸城一六留吉の小勢いゝ城我  
と相きての軍八汁へふは只要害を  
彼と一而く死を願ふは路へ――  
云甲斐の城と取らば敵の以名  
まうく河内事心う――此秋能く吉年  
為りとも中途へ――又城を攻めず勢  
なきは城下の百姓町人社家寺法師  
かうくも絶集城城守せしを能くハ大至

小豆粟稗近取入炭砲池新藁不  
動道日頃百姓町人寺法由は終に在る  
難物か――よても疎さし取入きよ道々  
道村の者大お敷の勢を治し――在るハ  
自給と欲ふ礼好さき――永代の損失  
あり――城も入る道村は己亦う男の  
長ひ此軍利軍は成なりハ一倍利潤  
して返――與んとて、利害を流流に  
懸――と中階――せりは女子婦人  
希なる才覚と将軍を感く感たり  
正木丹波作累のいたと、城方ハ小勢

なりとも川俣の邊より向ひ一蹴せん  
とは存心の大八州の城く多世願なり  
きうとすへ前後左右皆敵よ陣中  
羽生軍西の城と敵よなりきうと  
すへくハ城く川俣へ白人村程近き城  
より後を攻らまんよは防戦叶ひ難くは  
唯此よは尚城よ籠り運と天よ仰せ  
防戦仕へきなりと云々一更より  
近郷近村より宿僧一穀粒救ふ石  
石入りくは而燈山人社家法師一系  
城回より願をぬるやと糧を乞ひ

賊と員と悪地へ弛集者若干なり  
引て評定し各持品と定むと長時  
お港は美田加賀舟部と東徳田希三  
一社端成海名五郎秋山惣を小右京  
子前足将二十人衆高をかく音更  
大子行田口は今村佐治回源を有徳  
延平東須賀お洞大井之水河原舟部と東  
田次郎物産柳河部列不舟部と東古田  
彦と東福徳助々也兼足燈五十人衆高  
古よ四百六拾口人佐留口は心本丹波源生  
之水宮田之部と東久下岡嶋長此九家

吾見在室部安食部部長井新淨部  
源谷平三郎 是怪早相人 農高部合  
山部之居人 山谷八中 德信 德光 德重  
池上秋波部 沈守之 德重 繩子 立部  
大冢中重 白河部 民部 重 是怪 井之  
農高 寺法師 合 二百五十人 獨子  
下 德信 德谷 門 八 酒 德 德員 同 古 重 部  
大冢 長 寺 井 井 部 寺 西 寺 重 石 系  
波部 古 波 十 部 秋 田 波 部 由 田 部  
万 部 秋 田 部 重 重 是 怪 農 高 部 人  
德 信 合 二百五十人 四 尾 口 氏 右

大沼 多人 救 月 山 部 是 八 部  
右 馬 物 西 條 五 部 矢 口 部 室 田 部 物  
船 橋 内 通 物 是 怪 十 五 人 農 高 法 師 合 七  
百 五 拾 人 大 宮 只 月 水 城 德 敏 德 信 合  
波 部 物 山 本 波 部 九 部 依 地 橋 部 和 田  
是 助 川 上 部 重 成 田 小 波 部 橫 濱 大 學  
是 怪 井 之 人 農 高 古 二 百 五 拾 余 人 外 信  
只 月 子 子 林 立 部 大 原 平 部 百 百 物  
是 怪 十 人 農 高 寺 法 師 九 子 拾 余 人  
内 沼 橋 氏 杉 山 德 新 秋 德 三 子 又 自 部  
長 十 部 是 怪 十 人 農 高 古 五 十 人 共 八

佐々木萬十郎兼系於津山田又兼  
加賀守部三郎兼系於津山田又兼  
大木守部五郎兼系於津山田又兼  
林市守五郎兼系於津山田又兼  
兼十郎兼系於津山田又兼  
八木系織部兼系於津山田又兼  
兼井口埋門兼系於津山田又兼  
兼人兼系於津山田又兼  
十人女守部百餘人兼系於津山田又兼  
是也とお交へ大勢競勇む去るとい  
ふ事との石田普米大谷以下二万二千百

徒へ六月言小幡氏勝乃治ひし  
百の案内者を尋ねし一ひとし守部  
軍勢の自分とれ一で増の口方  
より取圍む先東小長門の言も  
長米大谷痛送水甲斐守伊東丹後守中  
越守少幡氏種治本深之部信林守  
以下小谷人合千六千五百人長門口  
より小谷口より川回し此取兼系於津  
山田又兼田水を浸へ兼系於津山田  
津山守より遠巻より法守天満守兼  
系守大谷刑部少幡小幡守兼



其の羽生岡岩嶺井木の澤人合をて  
二千六百余人なり是城を付田坊  
山々を望むべき地也其の八段口我  
軍くくは佐野村迄は陣を敷く其口  
乃其の石田沼外如陣城田果者如  
杉浦安直佐田是利栗橋也乃澤人を  
合く七千余人此は杉田より多く  
前はは大沼より其場悪く十人とも  
陣を敷く其の地は遠く川退き如也  
清水乃郷河助村也乃川回を次一  
四尾口乃其の地は中河或外少陣有也

此は村伊藤等共河越古河麻沼の諸人  
を合く二千余人押寄たる其地所と  
大沼より二百里是らさ河細路の長さ  
三町をより其者依る左右乃昭は沼或ハ  
源田山々を退き是より自他より其地  
少一の者あり其の地を是れて其地  
陣一者も其地より隔るなり三町角  
其の地は是れ故に其地は其地田只ハ  
ワさと一方道を同じく其地の心をて故  
せざるなりと計くは其地石田の澤不  
也其地其地と云ふは其地より拾口其地

をりたり石田不知して城を服下し  
見下して大鏡を抄せたりと云い  
志きり歩む城内一歩は是れ  
却て味方の陣軍當り飯沼村より入  
味方大勢討せしは大方より彼を  
之くは沢地は止常るはくは此陣は  
大に長此口のか後より丸返の宮より  
城を降り墨を染め戸を掃く事都て  
九重と宮より大沼二下りて恰も湖水小  
矣此城の南より又大沼より水漫りと  
浸たはは恥せして八海り城一城の

口はは深田より水は平澤より溢る行  
口の一方はは河をこれ居たりは  
さきとも利てはくき中も水は六月  
三日熱帯押多し一騎士の細路を水心  
をて多んと進たきとも僅なる細道を  
我方より一と多しをぬは城より探る  
さき深田より入るは南のみを沼より  
水より弱き砂地より抄せらるるは員死人  
多しは暇なり先下懸口の宮より大順より  
をりて馬より歩り之より押多  
宮を破んとは其府城中ハ城を解て

清遠道と引甘志の江橋内道物地  
妙の大流地と云ふ漢一宗の中へ  
步入る地は能は道一人は多一何は  
少一も極也(き)三石七八人抄教  
さきも貞八師文鶴一何ふハ一と  
下忍口の舟橋酒老親貞の勢と知  
然若門と押定きて柳子意風の想と  
な一切くおまは系は媒の子を  
教匠々如く遊んとするは道授く深思  
前入り沼田と臨く前後道を先入  
討留らるる者は百余人由り居てよと

貞者二百余人長時口は長水寺の忍僧  
秀院志若と棒と振るる言も我  
左右は藤之抄倒一汝未一、深院の  
降七(川)等も居ると呼なり、意三ハ  
以たり、山家と者と一能く、若田  
小言秋心成作徳田の雷士歎ハ、徳院、  
之をきると只思ふよと声とをけ流率と  
知一て家三を付川色立きと云ふ此  
者先只一教と讀く迹立きり長末と  
と一、め速水伊在中流經末亦是哉  
制一止めんと云ふも大慈智耳よ也

中入事は敗走を遂げず止事を請す  
 元の津市を以て湖川返一をり  
 大谷も天澤橋より早川一をり  
 七年亦道へ左右の沼田を隔て断死  
 成續茶葉より竹河  
 里史忠著法續略多著  
 光原佐助天澤寺中郷主小徳志田思辛昭順資信小の  
 加石田と同一城の攻一と志向  
 一考り

忠誠五藏(事)

六月五日、河津原に少部長政、木村  
 常隆、介重、茲亦已下、岩槻城を  
 攻む。忠誠、攻の加勢せんとく、白

け、徳川勢、中勢大輝、忠勝  
 子平、即忠政、平岩、子計、以親、吉重、居  
 吉、吉、元忠、榎村、七、佐、茶、忠、亦、付、也、又  
 小田、原、一、子、常、侍、新、く、清、也、長、政、付  
 長、也、口、介、港、一、若、津、一、本、村、常、隆、介、付  
 四、尾、只、一、白、く、其、也、石、田、治、部、少、補、之、成、く  
 方、一、道、一、若、是、付、之、成、属、持、堀、田  
 此、一、村、松、浦、号、を、以、集、富、一、清、一、等、八  
 清、也、長、政、攻、く、岩、槻、城、を、攻、前、一、今、日  
 長、也、介、長、一、若、津、一、た、也、只、今、中、道、号  
 長、政、之、く、急、一、堀、小、攻、く、付、一、若、也

長波城を攻めたりたらんは始り  
此城より向い来る我の面目と云いぬ  
戸懸りや色ぬらん致らくは苗子の  
面々心と一よりして口を攻  
破らんはめありきとヤ者もハ各  
皆ちと回多し其用意を以て翌六日  
未明より我を總て大沼を渡り大沼の  
中より二宮をうりの細道より又大沼  
堀河を渡り沼を我の細道より又其  
城を引よる城へ投入して其城へ  
城降りせしめ楯を並へ其陸へ大首

小首と云道へ攻立んと此口の守將  
面々我員士是程より知し其地を  
両義のやく我にお累の端を留せぬ  
内沼外沼大宮口の守將其名を少と  
均く言しは指口より弓矢絶の者我  
分くは其口へ向う救はしむ此者とも  
就來り益急し其地を我へ一階急  
敵々謝立しおらる心付たる路合  
と云々熊谷門を押寄り園地我員  
密におまはるは四方よりとつと  
逃散し其彼より討つことの

三百余人を負はむ百人はなたりて  
沼に臨み溺死せむとの故多し  
時討  
法よの人故牒し合を一言は採り  
亦たし付せむ  
此は破へきと  
石田三成一人の切を貪り流しは萬と  
計合を以て由り合して切せき事と  
なりぬさきとも大谷刑部少輔年頃  
之威と付討合の交り流しはさる中  
せき流し石田より合せんと天満屋に  
白しとも是も白木丹波烈く流し  
破れし流し長政ハ此城計畧を以て

扱を合せしむる人として  
年未の方より都々周の声矢さけしの  
高矢地の方より合せしむる人  
石田大谷は自己の切を合てけり  
つは牒し合せしむる城を攻めし  
見へきり合しぬ城合なりと  
九段は長政の口の外流し押寄城を流し  
柵を破る木戸一つは城も家を皆  
と流ししとも是も大勢よりに  
河をぬりし思ひしは攻入し流し  
流しは是も是も是も是も是も

昔侍此合儀量中一節々、長池口の  
家もたり一長米大倉大捕付体とて  
回一々をんとももともも海神勢一  
支らも進増込外の道より田と穀量と  
寄々唐口の後へ回し長米の家光家不  
常刀と知一園の声を後一々も八増を  
米後と故と交治毎々見へより  
長米の家人有坂宮内坊田新治部等  
年々一宮宮と出四样平部亦常をて  
我々付々此口付守機善田和賀共介  
小治秋山成作運回寄々長米の勢

と付遊遊をといつともけ虎口と八増を  
大い河田門の勢と一々なりて防々  
廻一と々々長池外港の虎口と弃々  
河田門へ川元知と河神の勢付勝心高々  
長波自身をへらんとは長波の勢付  
沖小平左合のともをん分を陣羽織  
少々を毫と張と廻と改とと知と  
善田運田秋山業治吉田兼長水寺の  
秀龍もは揚爪と海塩へ力哉一々  
権田二郎と秋山兼治の少々右京成海  
と長池は討死を報とと百金討を

之金は皆、外田門を迂入たり今は  
濱野勢を破るゝと是も如く我  
は田口の守將今村佐清との外濱田  
お相坂本將監福清の助多由赤土草三格  
余へ川具一葛道を穿てて始り  
結札不扣へ幸得善田如野回治部兼  
その兼後吉田兼秀宛ホ是より力哉  
得て益若我一頓を穿て侍此所  
濱野の侍大将沖小年吉は福清助の由  
不討も大岩の家人飯沼之水は今村  
佐清不討も言回表吾部は濱田出羽不

宍伏らも濱野勢少一ひ侍て杉城  
一たる如く天濱口の正木丹波ハ大岩勢を  
連敷一五十余人を川具一佐間口の  
間道より家子の左脇を討てり  
重切甚るるとゆり候今より此城を  
打つけ圍の声を發して是は濱野勢は  
勢の多少も是定ぬ味方の大勢  
能給せしは敵とて心測運心の者  
後より之を裏切せると是ゆり目と  
配り討てり此と云程こそ是も難三て  
我之よと與ふ一たるは味方の勢よ



押倒さき焼たふ者は起とららば  
諸般さふ城は付焼又急く貝降を  
鳴し圍を揚て突くべきは諸時勢  
力形く友親を〜 退たり石田三成ハ  
とく〜 長政、大切を〜 如み  
手智を割〜 潜り居るり 早尾口不  
白い〜 本村常澄ハ、浅井の城を攻すと  
少く〜 早く早尾口を攻入んとせし、沼田  
多く運兵〜 城より船橋内迄の籠  
乃妙の山〜 音目ハ大隈を〜  
市色は急〜 大隈討色は〜 空〜

川返兵今日長井口山〜 音目討死在真  
八百金 佐官口より十八人 如急口より  
八百金 城を付士乃討死之 是程百兩  
町人とも合在り 五十人 日〜 是れとす 大隈  
南陣 城中の肉也 是れ者も 吾の石田より討り、  
之城 南陣の切多し 是れ者も 吾の石田より討り、  
大隈の攻入り 是れ者も 吾の石田より討り、  
之城の急を 諸時勢とす 思ひは 沼田より攻入り、  
死傷甚し 是れ者も 吾の石田より討り、  
石田は 是れ者も 吾の石田より討り、  
是れ者も 吾の石田より討り、  
是れ者も 吾の石田より討り、

悪城水攻石田失兵束〜

六月九日石田治部が捕三城は出石六を  
在具一 津市也〜 是れ者も 諸將墓山〜

昂り忍痛を賜りし、乃ち縁を回し  
三階り大谷を来亦を我陣に招き  
某此備の陣を召くべしと下りて志す  
流水の彼岸の城乃ち田舎の境を築き  
利根吉川の山とせき入るゝ水改  
まるとす、此は城内の者は悉く魚後  
藤一とて中宮は長業も大谷も此  
計畧を妙なり、急ぎて之を知らざりしと  
同急し、今も石田大は恨む、此郷  
近隣の百姓四人、信信を探はれ、男女  
老若よ波らに納付し、古き八重子の

如く人救集り、臣通の臣別なく  
貴人入とて運ひ、然る境の深き、上  
霍間、善田川、頼長、神小見、寺丘、  
二拾五、神三、里世の石、枚、石、台の、境、  
口、間、よ、さ、二、宮、よ、く、不、見、は、成、切、を  
急ぎ、石田、二、城、は、石、り、在、り  
此を如く備役の人、吏、無、米、城  
豆は一人、清、立、路、文、米、一、外、庭、六、積、  
米、一、外、と、定、め、遠、心、より、馬、者、有、り、  
向、く、此、家、の、技、術、方、々、此、昔、作、我  
此、一、は、城、内、は、鞠、一、は、百姓、四人、在、り

積米を増んぬるに夜は城内を窺ひ  
あゝ備まらざる約をて去る運し地を  
築きし米積を増すのみならず其積以て  
米穀多買求め城内へ運入をたりし  
下より古へ岩侍者以ては奉り大に  
騒ぎ起ては城内糧米困乏は城々  
は敵城をへふは城々も如侍者を  
一と擲り首を剣く物へ一と  
浮城へそら石田は沼ちる三城山々  
汝中は小前を拍り大切と漲ると一  
そのなり此境たる切切せば糧米多

城内小積蓄たりとも何の用より立き  
城を三日悉く陥死すへ一と一人と  
人丈多く集め境の子く如就せん  
りと為一とをへき若一人も擲り六  
自余の人丈も擲り強動一境の  
成切に後をへ一と大に制一と只  
そ境に控をへ一とは四月十日は長境  
悉く城をせり石田を始法將大に積  
多し人丈を馳り利根長川を堰入  
の京境を切をへ一と水は弱り  
一と多し石京も一と長川を堰入

熊谷の西より一急登の場也(水を濬き  
をんと昔者侍十五六日成ては五捕丸)  
杖十町(古昔水漫くと流て只是湖水  
の如く是(今も是は言も付流名了)  
惻隱の哀情を生一城を二あり  
悉く水に溺る(死を)き幸の味も  
さよと(類類もさよ)と城也(八坊界き  
下ハ押入)と(言も)下ハ水と  
浸さ(只下)より蛇多く(毒)人取  
床の上(上人)と(在)ゆ(逆巻)七(のみ  
少く外は憂る(り)はれ(結句)城也ハ

逆浪天に漲り(是)終絶呆(一六)款の  
交(其)存(其)是(其)水(其)帷(其)懐(其)た(其)物(其)  
泰山の安(其)は(其)く(其)世(其)以(其)の(其)哉(其)乎(其)哉  
体(其)を(其)一(其)至(其)意(其)を(其)して(其)居(其)多(其)り(其)  
物(其)は(其)十八(其)日(其)の(其)夜(其)亥(其)刻(其)より(其)俄(其)に(其)暴(其)雨  
篠(其)を(其)つく(其)く(其)水(其)津(其)ある(其)折(其)る(其)靴(其)の(其)風  
烈(其)く(其)浪(其)類(其)は(其)新(其)境(其)を(其)動(其)し(其)ち(其)ら(其)  
子(其)刻(其)より(其)一(其)頃(其)終(其)り(其)川(其)類(其)と(其)云(其)ふ(其)に(其)  
堤(其)敷(其)十(其)ヶ(其)石(其)押(其)崩(其)を(其)以(其)て(其)今(其)日(其)尚(其)も(其)東  
岸(其)向(其)新(其)境(其)而(其)上(其)より(其)流(其)く(其)う(其)ち(其)逆(其)浪  
洪(其)濤(其)堤(其)の(其)後(其)を(其)り(其)至(其)き(其)は(其)河(其)は

以て水に押し押し切て洪水一面  
不押在時穿きの津言時さな時  
道は見へ巨碧時、留る津屋古は  
六七段押流さし不知津内の上方  
勢水より流る流き死を者二百七十  
余人を後水は川者もとも城也河田  
の如く深泥となりて碧人馬しと也  
是路と滑を城内ハ之を防戦の暇を  
滑く辛苦を休め者時是ハ石田三成  
津野より秀吉公の備中より松の城  
濃州加賀津井の城も水攻よせし

不望い水攻よせば城ハ落きしものと  
終極は膠此る才免しとく務の志似  
とる鳥の類なりとく皆利敵あり  
前編下は後時長政・麻を流く水攻と折留せし  
り是長政三層と確執の表なりと流すも先流者皆  
水攻の事と記して

成田津余甘原城圍退し事

石田長政大谷より小田原へ退を  
あはは上流に地御参の増く改前  
原林の城を小原なる事氏信計は  
少く城を津余甘原へ移し其城を是  
以て今当原城と改を傳中なり其時

神君秀吉公の所陣より海をせりし  
秀吉公海を州を以てして世にいと  
海に治す 神君山洗思ふく作  
あはれは折ひ心辨とすは沼田のそ多くて  
是情悪く大軍進退月也せりささ  
より取及ぬ御を家より無理より故小  
せんと致さんよは味方の人救多く  
換生は一人を換せしめて歎哉  
服せしむるを良將の智謀とこそす  
ちも 幸よ悪の城を成田より海へ小田原  
不 種播をらすとすは味方よ彼と知る

の者へ一和睦と扱つて軍勢を換せ  
あはれと安くと城をとり城を治す  
せんやう心付らひ方もいと作  
あはれ思ふに治しぬ秀吉公此城を治す  
一と二丈よりい六月廿日右軍勢  
山平山城をとりはは見頃成田と海  
とは知るなりとす及なり彼は消去  
しと海系を道めて見よと作はり  
山城は是を治すを退しつて是を此  
山城成田と争ひ勝つてすは右軍  
由り成田としつて成田はせりさ

志の者よき常々新治也。筑波の道  
一に徳り連子と嗜花の明成月の夕  
秀逸の句を拈一いつと。京都（是せ  
紹巴法橋、長刺と法可小山博も  
又此道の好士も）諸端の田井の  
清々、奴契をうたへ。四季節、清皇  
色して赤よちぢみ深き事。因白  
元より能くわしめ。若き八人分の  
子よとも山博も又山下さき一とさく  
山博も己く陣不へ帰り文徳めく  
編を求め成回の方へ送り若きその

文よ云

捧一封伸寸毫年仍兼く乳温  
同事。甚以心積くより更以甚深  
能中。因八州氏政治家人。一城、  
七八年或ハ波前博成成澤人年  
能ハ其容々々始博潤急く白眼茶  
黄翁翁若継く。其業能く能昌不昌  
今在只今。今一方寸秀吉云。即茶  
山果宜魏ナリ。一茶。台安心心  
急ハ愛山思惟む。急の使也。切  
芳之。一。條不違亮筆。山。心。博。

清云

六月廿

山中 山樵古七優

成田上徳古優 伝者山中

山城古よりし使を適中とせし者一古も  
恙なく成田の津より山に上りて古を不  
断面し終りて古の利害を説得し  
書名を清し古ありて古を縁返し古書  
を及く沈思し古の角小隙を滅亡ハ  
遠きは以て古の先祖の祀を絶さるん  
計こそ古を一古とせし古一古て古書を  
使古の清し古の古も古く謝絶と

中述たりし八厨下古の難成編と  
貴客の芳志と取入との執之甚返書  
乃文よ云

山内山に古香古牙雖も紙よ云  
山内山に古香古牙雖も紙よ云  
山内山に古香古牙雖も紙よ云  
止古城の公持清云

李夏念日 成田上徳古氏長

山中 山樵古七優

山城古は成田の返書と清く古書と  
持し古一古古の山内山に古香古牙雖も紙よ云



大に恨多し我又斗少旨切りとて遷  
神君を招りし是より猶南の旨り  
仰せ成田は路を津に集せしむ時と成  
成り書言を 徳川殿より書りし  
氏直方へ送り治し切のやく八州の  
城には皆津に集せり城を籠る可れ  
治將も多くは主君の内をせり今度  
天皇人臣より急し氏直は是より急し  
軍門より津に集り 取願を安堵し先程の  
家々名を失ささんやう斗つるへ出せし  
治是より急しと 治直は

神君取りぬとて成田の書言をせし色  
物と治直ら成氏直は成田の書言  
を宛て大に驚き父氏直より  
若きは氏直も且怒り且驚き是より  
小田原城より大に驚動し群衆のやく  
起り成田泉のやく治を頼り難く  
又へは成り氏直は成田の津に使者を  
遣し多く評議せし事治直は成田の  
治直らと治直らと成田の治直ら  
治直らと治直らと治直らと治直ら  
治直らと治直らと治直らと治直ら

田村女梅と使と一 旗田ハヤヒ  
幸ハ其方ニ心といふく地城中一馬  
風流すといふも 未其虚実定、然レ以  
依々對面一々を實取らん  
五三使を送といふも病と懸一々  
其ハさ海ハ迷心己マ新ハ一々一  
返答吃とヤハ一々一々ハ旗田也  
今ハ遊遊色ぬ不と思ハ幸ハ交定  
一々一 京路大軍を以テ幸ハ居城  
忠信を十重共重ハ以國城今ハ  
防發乃御を妻子一強ハ中遊也

節ホ農丈高ハヤヒ悉ク死を待のみ  
取リ某是と云ふハ忠信城中一男女  
今此人ハ山中ハ信と云たり因白後ハ  
降ル某と云んとす知更く信ハハハ  
少懐信事ハ忠信ハハハハハハハ  
一々一 首を刎らハ一 忠信中言今ハ  
今ハ某一人ハ余替らん事一更ハ  
痛む可ハ忠信ハ人救と云向らハ  
某ハ勢云名人皆暖切ハ討きの川ハ  
一々のよをハはらんと少ハハハハ  
返答ハ氏改父子け也ハハハハハ

只今藩世んときは城中一たは強動  
 之身ノ為リ利と切らまんも計張一  
 可治成田と城より外もおさうらん様  
 明以一ととと山中郷古妻小八千ノ  
 人故と成田と津普ノ里方よ柵城  
 結四一巻く堅信せむ時後忍ノ  
 博三古は未成田と津糸ノ事と知  
 新は於翁博一とととと小田糸  
 成田津糸せ一とととと博と唯けて  
 津糸一糸と物と一とととと山中郷古  
 とうも多細と氏長は妻よ故り已よ

津糸とせとぬ今は誰とるよ翁博  
 世人事と子と津糸切て物一とと  
 中入高子ノ法将とと子と博と法凡  
 城力一男女は悉く物糸と一ととと  
 らとととと津津村石田大谷長本糸  
 とうも其台城中一とととと氏長已よ  
 津糸ノ上は是成よ及一ととととと  
 城乞と悉退去と百禮町人寺法師法  
 与は翁とと一糸の女と怪と事浪

編纂 藩譜 藩業 藩政 藩治 藩教 藩俗 藩風 藩習 藩俗 藩風 藩習 藩俗 藩風 藩習  
 松尾石馬を巻 藩政を論 藩治を論 藩教を論 藩俗を論 藩風を論 藩習を論  
 月日之記 藩政 藩治 藩教 藩俗 藩風 藩習

松田隆保の事  
松田隆保の事

松田隆保の事

小原の第一の執持松田尾張守憲英  
お千金持の將として隆保氏に改  
父子の寵任を蒙り其威八州に  
うやうや法人の言致隆保一州の  
大小名其下用は隆保令命賦家と  
稱せしむるは富貴榮耀を極め  
藩本有海邊を志し一己の論者とは  
思ふも其と取柄一壘球と與へ  
我々堀いさゝは隆保の悪と云

孫の者爵を加之る程は八州の士民  
押並く尾張を怨む所といへども氏改  
父子尾張の御侮く隆保の二の良臣と  
思ひ軍小の大事只尾張一人に  
要知るは隆保の隆保の事  
隆保の事隆保の事隆保の事隆保の事  
あり姑男を望岳新太郎致竟二子  
松田隆保の子隆保の事隆保の事隆保の事  
父より隆保の事隆保の事隆保の事隆保の事  
自用をん事を好む小人父子若君の  
偏邪も更小毎にぬ者なり己は先年

甲州乃武田勝頼より討らばきて異代  
乃より逆襲し伊豆必戸倉乃城より  
抛る勝頼より澤余一三四系一敵乃  
色を敵し天正九年十二月小田原乃  
討白を待く合戦せんとせし一  
小原左衛門守良氏勝く大軍後向せし小  
及し忽し澤余は主尉も霧島尾張の  
嫡子也一澤中より悪兵しとく物命  
せし色甲斐守も命なく一昔り次男  
右馬助は其心父兄より似て白虎より一  
温厚の性質もくも容色英傑之令もは

幼童より氏重の毫と書り勝下すは  
昵近し夙夜在丸と給更し一父の  
許より陽志事は著せり一三男澤部八  
父兄より似たり奸曲人なり父尾張守  
憲秀より悪く豊臣家乃計畧小臨り  
小原家滅亡せば嗣子と押順せんと  
不肖の志を播く関白下白の次年より  
防戦の事を始又関白内色より澤を  
笠掛山より移し信濃事をもめ何と  
豊臣家一媚て關下の世を又取んと  
浅智を回し一昔り一昔り一昔り

八割の城も追て攻めさす類不  
思ひ一味方も多し。滝糸一長  
運清の道は取切らる。小田原城は  
攻めよ。岡崎一人情文よ。岡崎ら  
野文六月三日の夜。和田三浦の常は  
陣營を自焼し。小田原を奔る。以  
尾張守此体と云々。滝糸よ。志我  
没。た。知。八日。岡崎。尾張。督。表。治  
を以て。氏。並。も。滝糸。を。進。ら。せ。し。り。  
高。よ。秀。治。も。尾。張。守。へ。喜。書。を。送。り  
為。す。内。世。の。通。流。程。切。て。秀。も。城

城内へ川入。水際を止。小おわく。八幡  
相模。西。風。を。以。て。憲。秀。よ。忍。者。を。一  
との。殿。下。の。少。将。たり。と。傳。へ。は。尾。張。守  
怪。ふ。り。張。り。  
家。忠。の。地。は。和。田。へ。移。送。は。ま。し。り  
和。田。守。部。主。助。も。秀。も。内。を。せ  
牧。と。は。勘。引。六。月。十。日。婦。子。の。計。立。部。を。始  
左。馬。物。弾。正。部。並。は。舞。の。内。藏。た。也  
和。田。北。條。お。と。集。め。憲。秀。中。七。日。向。付  
今。量。信。殿。下。の。威。徳。海。内。よ。く。也。く  
是。よ。肯。く。は。小。條。家。滅。止。の。時。到。向。と  
云。も。の。せ。り。止。我。推。く。存。を。固。く。是。ハ  
邦。の。甚。品。之。と。云。奉。り。天。皇。人。皇。小

遺ひ時機を失ふは智者のするべし  
以て小節を拘り天運を無せざるハ  
匹夫の仕業良將の至知より小節  
今因八州の軍也此威小節を皆敵下  
子孫の遺業を絶せんとせしめ  
我輩余より則ち管轄し一處に内包  
之をりし今我輩を治る尾港舟  
津重切し一忠切を主付時、伊豆相模  
兩國を惣揚るる子孫を遺る愛  
之屬するに忙し此州を揚りぬ

東夷の陪書と一々朽屋ん方うあふ  
乃と有り天日之光よあらん事何ぞ  
わきまき大幸なり在也唯十五の  
夜中子川し一語細川池田の勢我  
城内へ入る我亦一門に合重切せん  
城内の徒らも源は悪く知れりたり  
何の爲も有りき氏政父子一統の自  
削らる生痛く敵下へ第一の忠節を備人と  
思ふなり女中も悪く其心して唯視  
重切の切と願む一とと中一者侍  
新立節を始と一洋節も一門たて

是は第一の少将兼将ともなる事  
何れも戦切を心づけへりと皆々  
懐ひ回さしたる其中小左馬物情統  
とて大に警備せし是ハ大人乃佐左  
兼へは勿論体なき少将ひをもたさ  
事々れ松田の家と云は小傑早雲云  
けく君も五代長も五代小傑家股肱  
岡田の長も君は一族の親恩隆烈  
若輩と共よして岡八州と并吞し  
松田といは凡庸を善者好く八州の  
士民小為致せしも是ハ小傑家の

重恩なる事やうく重恩を懐き  
乃く君を急存亡の類又一族挙く  
震切し澤余不臣の汚名を厭ひ  
巨相西州と憎きりしも深雲の留美  
天道は皆く重罰必松田の家も滅し  
せんハ能れし一羽渡りしも思ふ  
改め善者中誠者も此と之君父子  
追をりし善者と勲者も當りて款と  
城下より入る皆教くは於て  
是も計りしは君乃大に善城と城と  
岡田の大军と戦く一歩も退ら



討死せば天啓忠義と後世並も吾れ  
名は疎尙辱一尊く不義不忠の  
少中ふハ嘗止らせ給へとた馬物  
花を款二八の顔ふ端を洒流せば  
少人死す感一きり屋後も新堂を  
兼やの若きた馬物の道徳をせし  
是見よ且初且懐ういやく我亦う新  
計尙事合一牙の爲ちふは汝亦我  
世よか一計未の業を名物と思へん  
汝う覚悟相ハ我亦う甲斐や余時ふへ  
く論れ一と父付甚は恨名と接く

自害よ及んといは兄新六はとて  
た馬物を白眼て父よは汝う計未を  
辱く思ふ一計未を捨く大事一我  
企りよと子の爲とて父兄を勉む  
不孝不義罪有る四々天罰思ひとて  
討く捨んとはく錫なり一程も許すと  
何をも是如とも定無只庵浪と新六  
とともよすうり付あう刀銘免押兵  
二現又籍よは納くも納免出で親  
父兄の胸中一見て死た馬物とて  
某、浪をう父兄新六とて思給浪を

好まは来い〜道者仕〜き一向仰  
徑〜喜切の蹴切と願〜  
流石尾張も顔色柔々さ〜  
評定と〜漱〜お侍左馬物心中  
先〜見張を延川さ〜  
あ〜〜思付ぬ〜愚存を中出さ  
改見河も〜尚念は吉日を担  
事〜〜  
唯後十言〜定り〜  
富美始い〜

又其旨と密言〜  
中〜  
庭下〜  
外〜  
尚〜  
左馬物懸睡〜  
小姓と〜  
入〜  
小姓〜  
櫃と〜  
櫃の中〜

一大事と云はるは為夜中に出仕せり  
来り心願少少を治へて一と云ふ  
不中者為氏主は最忠の右馬物  
事なれば女願公もよくも云ふ  
伊豆屋一先一大事とは公事と  
身は侍右馬物流押御し者忠を  
言さんと云ふは親も不孝なり  
衆  
不忠の忠あり一牙進退定ま各り  
と云ふ父兄の命物治らんは此事  
色も中上屋一と父兄臨謀返一

中述きり氏主大に感慨一母忠を  
いつの世も云ふき願返は一  
少布たりと云ふ事そのを氏改小  
若くは八氏改も大に怒り十五男孫  
尾張を如丸へ出たり尾張ハ右馬物  
頼親如丸へ預り一事も知れ臨謀  
之縁とは思ひもよく治は定て例の  
軍談定成一と何心好く仕一は  
氏改父子は討回もせし陸奥守氏輝  
板部家江吉あ人かへ尾張も中は  
甚方重代恩願の身を以て送る

企より一息を歇りて考へ去る者あり  
いふ子細を以て叔代へ至るに哉  
願はば叔代より及つてや包中より甲州  
其へ一と意向せり意ありと  
抄物に二は信とも免ぬ身よりもいふや  
先年一畝田信吉と甲谷の畠中よりと  
松田池邊へ甲州へ内包もするより信吉  
方より叔代中へせしむるひ  
今も先其やく叔方より味方を離間  
させんぬる信風流を中させ居る  
たふと一物とものと其へ推し

此用ひて公家君忠信と叔代不幸は  
治世に於ても程田家の害を川也とい  
申してや乱臣賊子の言に於て味方  
銘を地へ記し心皆離れしと叔代虚を  
示せらるる考も能く勅考也とい  
何れれく返さる氏輝大に怒り其方  
巧舌を以て身の咎を逃んと思ふとも  
汝う隠謀の詭ををる者と誰とて知海  
ぬう次男左馬助なりといひて意あり  
信天一の言を以て信か一叔を細と  
おさるるを意し用意の力士ともあり



いふそのちりりと矢のせ流ひきとと  
小田系記巻集  
編年考録集

井伊直政源曲輪熱切之事

小田系城東より方芦子川浦の北南橋  
より一町をり上り以たり熱切外湯門寺  
といふ寺の四縁一町をりして少  
言此寺の城をけりし所を築き城を  
くわ来其裏は竹林なり爰より一町の  
橋を架し源曲輪と名付蓮池乃  
お城より又捨曲輪とも呼り此所の  
守兵は山角と申すを子守御をた

右馬助之へ〜守りせらるゝ氏直は可  
くをせり〜頃日城を毀棄〜是  
乃官のみ云と也〜七代と行り此城  
を抄せきり此口の事は

徳川家の口先井伊直政が捕直政  
を不承付松平周防守康重牧野右馬允  
康成等なり康重康成は信を文て  
甲州より金堀ををりて地留を穿て  
此部を堀崩さんと云其と堀水と海へ  
切〜堀〜地を乾〜改竄の役と  
せんと云又 神君直政と云〜

橋うくととらり けら内を改いつた  
事とも心持らるる源く業一相い  
いう橋中も彼橋下の水の流儀を回つて  
うらやと思ひぬくちよ抗立て出の  
深さをとらり其抗を削り當り岩を  
ちり常きは自舟水溜り下まき能く統て  
出陣よりあり勢とせよ又岩も始の  
如く橋うくととらり 作らるる一八歳  
原心持を危角よ業一相い相下始  
後と取り一とらり 口拾八日を屬して吃と  
思得く 自舟水溜り一思んて彼水又

河橋を踏んくく 橋の柳也れよとく  
くく 海者先一急き 河原よりあり  
此中又刻と中し 神君を耐其業  
くく こそ 河もく船の事林十く 乙浦  
やんんと思ひくは 甚多と八云さるき  
くをりの変りせん事 我もつたよ  
控へは 似合ぬ物とと 定一を改心よ  
思ひくは 相はけ不直改、踏よて改磔を  
とこそ 互や色 但彼橋のく 刻中を  
同くせつは け不と改磔ら古此橋を  
橋を親て改入さんよは 味方の人よ

云甲斐守と嘲らせんも云々なりと  
おとしし西属の唐洲勇徳之科肥前  
と云々此の事と云々唐洲之科一  
ヶ絶の不政有ん受物乃殺なり此の事  
とも政換一たんよは是若一  
一論を如心も勢の軍士の  
子牙亦の若殿系一と政させんよ  
たとひ政換一たんよ何の苦一  
くも又又と一談の老武者も  
子牙亦を物事と云名させんと其  
お守者なりは勢よ不足は有る

免前若殿系一と政らるや  
り云一は忠政もけ成切池一と  
回急一と時を待て居るなり  
若殿六月廿二日の夜候に暴西烈風  
あり彼人全塔丸の穿たて古居急平  
崩れ一塔も柵も悉く顛倒を時六  
り云一と云一と忠政志しん不  
系お守業のこも若殿系父兄  
叔父と云と此加り一は思ひ一  
多勢よなり迫る石見と云一塔よ  
子牙と云一埋草と云一塔を



埋め攻へんとし城を迂襲すを  
敵は夜攻り我たるを射死せし  
雨のこともあつたり我は是を  
予もせし追及石見の子登り物を用  
一書よ入るは決して白坂傳る  
追及敵は日全た其の餘を  
木保傳た其の昔沼部をりも入りて  
河の石守もわく藤由端を射死せし  
追及志んくあつて彼橋の邊に押寄  
場中よ白ひ自れ射死おつた  
放つ玉も葉とてまゝく之をり

市を以て首忽り列せし追及古の  
指を破りさきとも是を更ともせし  
相映の楯控へてあつて声あつて  
攻へりて一若敵亦あつては  
少くもたつたらん一屋を名勇と稱す  
敵よ我たり松平周防古原をり  
一隊も後き一と押寄るは城を  
貝嶺と名一松明を投出り空を  
為運と名く熱して小田原城をり  
軍令も物以是は六百人よ弓矢を  
持せ申り別り大石門の也

集り留保一三百人ヲ二日又分色  
終夜懸掛せしり置月百人ヲ四支  
若歎何耐夜付入しと付ノ持口  
くらは是と故に夜巡りノ者此如て  
故一ととの控也一人夜付りしは  
周り却て客と集る者もや一  
山前父子は自勢教くは付たさる  
系は係係と系と揚々系入りと  
尺ノ形は夜巡番の両組六百人とつと  
付て園を張り横合より南よりと付  
此様本は七十八人の既山林路の如次

一番又控と合せ山四十支又山端強流  
言ふは或く改動の服を穿て甚也  
力哉一山並京安徳佐元も従は廿人  
川つぎ或く舊戦の雨は降止たり  
いとも目指し初めぬ周の夜由一歌傳方  
尺分重く回古村をくは行りともや  
虫取付のり者大剛我いハ敵是たり  
候く候方もあふさるは揚々報を用い  
ありとも二候に分ち山林路の如と  
後敵と一聞くと川九人ととる  
尺々山前記伊与父子是哉巡討す

せんといふ事は川にりー井戸、  
暫又一畝一區一錢よ、土改は属せ  
らる一甲州士細田勅一郎正時能説て  
之は百人、家又河死は山林賜物、溪激  
一々、敷多々、新伏懐を富利一、  
此種水は物、恒者堀、所きと川揚て  
用、川に土改是を乃々、山林、今夜の  
挙動、只是人中の鬼なりと孫天せり  
始土改堀内へ改、今時地記を考、  
西郷道土、標系活、今、二百余人を  
自、物を説、在る、堀を引、一

とは更よ、知、以、是、と、礼、一、と、追、討、也、  
妙、西、に、標、系、よ、く、と、知、一、堀、云、哉  
也、や、り、一、烈、風、の、後、す、も、如、く、物、を、記、  
図、を、揚、討、く、至、是、付、堀、を、思、ひ、前、に、  
教、く、と、振、損、一、八、方、に、教、礼、す、追、及、堂、の、  
白、板、傳、言、始、味、方、返、一、合、せ、寓、之、  
堂、く、物、の、堀、云、山、屋、基、内、を、討、け、り、跡、り、  
續、く、云、と、も、討、く、首、二、級、を、得、き、り、  
量、初、も、一、番、首、を、礼、一、の、家、よ、く、と、  
又、首、を、取、つ、と、原、に、本、村、を、要、り、も、能、働、  
言、名、を、堀、を、付、大、日、礼、を、改、定、一、堀、

焼く死する者も少くなく山内  
父子之は幸して死を遂げぬ城は  
近入る部亦廿七人は回一城は討たたり  
今更忠政の討死に言合人城首の首  
口首余級討たたり城首は城より出て水  
邊死する者も言合人又入りしと  
忠政討死首とも一城一者も八望女言  
そ首ともを岡白の山内へ送りし  
忠政の軍の者終をらる者も八望女  
山内斜水は凡此備後百早も金と  
いへとも城を隔て矢玉の迫合も

のみうう太刀打ちの勝負は忠政一人は  
浪きり幸留と陣の暇を暇一城方の  
流れと益事大幸是より又城首  
うは八州の勇士勅卒籠るといへとも  
我も右刀を合せ一は山内父子之  
乃印は一む山内城首の跡更  
なりとも候り共と一は山内城首の  
跡更一追更言物白坂侍を言合り  
言合物時十七才南都言合り名馬  
英は紅梅雲の陣羽織を揚りて此更の  
射切を崇せし侍言も強馬と

揚子又山林勝處は

神君より長刀我揚りぬ 大藏紀藩録

按ては、神君車政とて、揚り

揚りて一の揚と挙つし早八と経

てて其心を作らざりて、海を

神急とて作さる重人の人我

教へりて事も常と動のや、凡

身常の事も其人の自ら心

揚ぬまは、いづれも、何と云たまは

とて、修り善益形、てて、我は

臨ては、櫛又、修り、愈むる者、

人の教と教へて、此の車政、

神君の作とて、或く、四十八の言、心よ

た、い、思ひ、を、り、も、凡庸の人は

此の心とて、功、を、も、修め、人、を、も

修、ん、事、を、思ひ、回、さ、は、な、と、善、道、を

修、さ、さ、も、凡、人、の、初、は、云、も、や、ぬ、

重、人、の、初、も、も、亦、少、た、る、本、の、心、可

揚、ぬ、と、い、は、る、事、も、思ひ、申、し、凡

そ、修、り、修、り、一、正、心、を、修、り、て、善、道、を

修、り、修、り、大、智、を、修、り、て、善、道、を

修、り、修、り、と、云、を、修、り、て、善、道、を

此心形うらんもは甘とくまうんか  
昔吾人の中作りき

改正三河後風土紀卷第七終

愛知県



1103264633